

4971 **メック**

**前田和夫** (マエダ カズオ)

**メック株式会社社長**

## 主力薬品の好調で増収増益

### ◆薬品売上高が堅調に推移

当期のトピックスは、為替については想定レートより円安で進捗した。米ドルは想定レート110円に対して実勢レートは113.74円(前年116.89円)、台湾ドルは3.41円に対して3.66円(前年3.55円)であった。為替の影響は売上高で前年同期比42百万円減、営業利益は同7百万円増となった。台湾ドルの影響により、売上が減少したものの利益が増加した。

薬品はディスプレイ用の薬品の伸長、CZシリーズの堅調により売上高11%増、出荷量14.1%増となった。

また、2017年12月期第2四半期および通期の業績について売上高、利益ともに上方修正した。

当期の業績は、売上高24億95百万円(前年同期比8.5%増)、営業利益5億19百万円(同2.1%増)、経常利益5億23百万円(同11.8%増)、純利益4億35百万円(同20.2%増)となった。薬品売上高は24億25百万円で、売上高に占める割合は97.2%(同2.2ポイント増)である。海外売上高比率は52.8%で微減となったが、ディスプレイ用の薬品が日本国内での販売が好調だったため、海外売上高を押し下げた。CZシリーズの売上高は12億5百万円で、CZシリーズ以外の薬品が増えたことで薬品売上高に占める割合は49.7%(同5.2ポイント減)となった。粗利率は尼崎事業所に関する減価償却費や発送運賃、人件費等の増加により62.8%(同1.3ポイント減)となった。当社薬品海外使用分の国内代理店販売を海外売上高に加算した場合の比率は71.3%(前年同期75.6%)である。

### ◆2017年12月期第1四半期決算概要

常務執行役員管理本部長 北村 伸二

売上高は24億95百万円(前年同期比1億95百万円増)で、薬品は24億25百万円(同2億39百万円増)、機械は39百万円(同1百万円増)、資材は29百万円(同46百万円減)となった。営業利益は5億19百万円(同10百万円増)、経常利益は5億23百万円(同55百万円増)、退職給付制度の一部を確定給付制度から確定拠出制度へ移行したことにより特別利益として退職制度移行益44百万円が発生し、四半期純利益は4億35百万円(同73百万円増)となった。

連結貸借対照表については、流動資産は現預金がタイ子会社設立の資金を主とする10億円の短期借入により53億57百万円(前期末比6億38百万円増)となった。その他は尼崎事業所建設に伴う消費税額と売上にかかる消費税の差額の還付により84百万円(同2億68百万円減)となった。固定資産については、有形固定資産の建設仮勘定が欧州の新社屋完成により46百万円(同54百万円減)となった。投資その他資産については、投資有価証券が時価の上昇により5億17百万円(同54百万円増)となった。

流動負債については、短期借入金金がタイ子会社設立資金、運転資金の借入により10億円となっている。設備関係未払金は尼崎事業所設備関係により33百万円(前期末比1億72百万円減)となっている。その他は主に賞与に対する社会保険料の預かりにより5億21百万円(同43百万円増)となった。1年内返済予定の長期借入金

は 5 億円、長期借入金は 10 億円で合計 15 億円だが、長期借入総額 20 億円に対して 5 億円を返済している。

株主資本は、利益剰余金が 124 億 94 百万円(前期末比 2 億 42 百万円増)となり、その結果、負債・純資産合計は 186 億 38 百万円(同 6 億 44 百万円増)となった。純資産は 133 億 19 百万円(同 2 億 9 百万円増)、自己資本比率は 71.5%である。

連結キャッシュフローについては、営業活動によるキャッシュフローが消費税等の還付により 4 億 36 百万円(前年同期比 3 億 72 百万円増)、投資活動によるキャッシュフローが有形固定資産の支出によりマイナス 3 億 20 百万円(同 2 億 14 百万円減)、財務活動によるキャッシュフローが 5 億 58 百万円(同 12 億 50 百万円減)で、その結果、現金および現金同等物の四半期末残高は 43 億 97 百万円(同 7 億 40 百万円減)となった。

売上高の四半期推移は、前期第 2 四半期をボトムに上昇傾向が継続している。単体については前期第 1 四半期から上昇傾向となっている。営業利益の四半期推移については、尼崎事業所の償却負担の増加、出荷量増に伴う発送運賃等経費の増加により、当期は 10 百万円の増益となっている。経常利益の四半期推移については、為替損が発生したが、前期第 1 四半期より減少したため 55 百万円の増益となった。四半期純利益の推移は、退職給付制度移行益の発生により単体では増加している。

品種別四半期推移で薬品売上高は、四半期単位で初めて 24 億円を超えた。薬品別四半期推移は、銅表面処理剤が前年同期比 11.2%増となっている。また、エッチング剤、その他表面処理剤に伸長がみられた。一方、密着向上剤は数量ベースでは 10.4%増となったが金額ベースでは伸びなかった。21.8%増という伸びを見せたのが単価の安い車載関係で使われる CZ-8100 だったことが要因である。

地域セグメント別売上高推移と海外比率は、日本が前年同期比 13.3%、アジアが同 7.0%伸長した。欧州は前期第 1 四半期に取り扱い機械がスポット的に増加したが、当期はその分が減少した。

今期より決算期を 3 月 31 日から 12 月 31 日に変更する。今期については日本単体は 9 カ月、海外子会社は従来どおり 12 カ月の決算となる。2017 年 12 月期通期連結業績予想は、売上高 90 億円、営業利益 14 億円、経常利益 15 億円で増収減益としている。

## ◆今後の事業展開

社長 前田 和夫

当社は研究開発に注力し、連結売上高の約 10%を研究開発に先行投資し、単体人員の約 30%を研究開発に配置している。

近年、当社製品は高密度電子基板を介し、さまざまな電子機器に使われている。コア技術は物理密着技術(CZ シリーズ、V ボンド)、微細配線形成技術(サブトラエ法技術)、表面処理技術である。また、最も注力する分野の一つに選択エッチングという 2 種以上の異なる金属が共存する中から特定の金属だけを溶解するエッチング技術を有している。フラットボンドシリーズは顧客で量産が始まっている。

今後、モバイルネットワークが 5G 化されると、高速、大容量、信号の遅延がないことが求められ、それを支える技術として、当社の CZ シリーズ、EXE シリーズ、フラットボンドシリーズ、UT シリーズがかかわってくる。AI、IoT では、センサ、プロセッサ、メモリ周辺の電子基板への CZ シリーズ、UT シリーズ、EXE シリーズの採用が期待される。2025 年にはドライバーレスの完全自動運転が実用化される見通しで、ADAS 等のさまざまな分野で CZ シリーズ、UT シリーズ、EXE シリーズ、フラットボンドシリーズの重要性が高まるとみている。

また、2022 年に向かってスマートフォンの HDI 基板にはリジットフレキ基板、フレキ基板が多用される流れにある。L/S(ラインアンドスペース)はハイエンドが 20/20 $\mu$ m、ミドルレンジが 40/40 $\mu$ m、ローエンドが 50/50 $\mu$ m となり、CZ シリーズ、UT シリーズ、EXE シリーズが、新しいタイプにいかにか採用されるかがポイントだと考えている。

CZ シリーズは銅表面の超粗化を実現し、銅表面の独特の凹凸形状により、樹脂との密着性を高める。主力は CZ-8101 で、進化版の CZ-8201 がある。研究開発ではさらなる超粗化に取り組んでいる。

UT シリーズは、圧延銅箔の銅表面粗化を実現する。基板の高密度化に対応できるが、フレキ基板、リジット基板などのあらゆる基板、またセミアディティブ工法、サブトラ工法でも使えるため、広く展開していきたい。

EXE シリーズは、現状の設備でエッチング剤に添加するだけで使用できる。スイッチングコストをかけずに細線化した配線パターンの高密度基板が作れるため、実績が上がっている。

フラットボンドシリーズは伝送損失を防ぐことから、5G 化に求められる技術であり、注力している分野である。

V ボンドは、車載基板や HDI 基板での着実な採用の増加を見込んでおり、薬品売上高のベースを支える製品として期待している。

アマルファは金属と樹脂を直接結合させるための当社独自の金属表面処理技術である。構造体の細かな加工、組み立てに使われる薬品で、主な実績として端末の筐体に採用されている。

近年、電子基板関連分野は高密度化など技術が大きく変化している。その変化に対応しながら、求められる薬品プロセスを出す一方、新たな分野の研究開発にも取り組んでいく。

経営基盤の戦略として、技術マーケティングを強化している。グローバルに当社のプロセスを知ってもらうため、日々努力している。従来も基板業界を中心にさまざまな企業と共同で研究開発を行ってきたが、さらなる推進で当社のキャパシティを広げていきたい。

## ◆ 質 疑 応 答 ◆

**通期計画で、上期の上方修正に対して、下期を従前より下にみる背景を伺いたい。**

当社では業績連動型の賞与を採用しており、下期は利益の増加に伴う人件費の増加を織り込んでいる。

**薬品の売上高の内訳を伺いたい。**

伸びた薬品は SF シリーズ、EXE シリーズである。SF シリーズは前期第 4 四半期より 30%、EXE シリーズは 20% 伸びている。

(平成 29 年 8 月 9 日・東京)

\* 当日の説明会資料は以下の HP アドレスから見るができます。

<http://www.mec-co.com/ir/library/>